

みずほマーケット・トピック(2020年3月26日)

EUに楔を打ち込む中国～マスク外交と侮れず～

欧州全域が新型コロナウイルス対応に四苦八苦している中、その隙を突くような中国の鋭い外交が見え隠れしている。中国が欧州に対して矢継ぎ早に医療物資や医師の供給を行っていることが報じられている。医療物資の域内備蓄を巡ってEUが内輪揉めを抱えているところへの動きでもあり、にわかに「EUよりも助けてくれる中国」という機運が一部の国で高まっている模様。こうした動きをマスク外交と揶揄するのは簡単だが、近年の中国は欧州域内の要衝に戦略投資を重ねてきた経緯があることを忘れてはならない。もちろん、ウィルスの震源地としての汚名を返上しようというのが主目的であり、欧州の域内政治バランスをかく乱しようという思いは二義的なものかもしれない。だが、結果として一連の人道支援が元々存在した欧州の亀裂に対し楔(くさび)となっているのも事実であり、複雑な背景事情を踏まえ、解釈すべき動きである。

～かえって不安になる株高～

金融市場では2兆ドル規模の米景気刺激策の成立間近という期待の中で株価が連騰している。実体経済が直面している苦境に変わりはなく、株価の裏付けとなる企業収益も今後は悲惨な数字が上がってくるのは間違いない。リーマンショック直後も株価が連騰するシーンがあった。最近の株価の上昇幅や連騰について「2008年10月以来」という形容が散見されることから、かえって不安な気持ちになっている向きも多いのではないか。2兆ドルは確かに巨額だがコロナショックで沈んだ米国ひいては世界経済を引き上げるほどのゲームチェンジャーにはならない。そのようなものがあるとすれば新型コロナウイルスに対抗できるワクチンの開発くらいであり、それまでの間は株価および米金利は実体経済の地力が露呈する中で今一度、下方向の動きを探りに行っても不思議ではない。

～中国の「トロイの木馬」作戦～

ところで、欧州全域が新型コロナウイルス対応に四苦八苦している中、その隙を突くような中国の鋭い外交が見え隠れしている。多くのヘッドラインに埋もれて注目されていないが、中長期的には欧州が抱える地政学リスクを考察する上で大変重要な意味を持つ動きと見られる。過去、中国はギリシャの財政的困窮につけ込んで同国の港を買収し¹、近年はこれを足がかりにしてEU域内に複数の戦略投資を行ってきた経緯がある。中国は「一帯一路」構想の下、欧州各国の要衝に対して多くの投資を展開しており、一部ではEUの内破を狙う「トロイの木馬」作戦とまで呼ばれている。相手の弱味を見つけるや否や、機敏に攻め込む外交姿勢は中国の本領である。

こうした文脈の下、注目されているのが中国からイタリアへの支援である。既に感染者の爆発的拡大に対応が追いつかず、いわゆる医療崩壊の状態に陥っているイタリアではマスクを筆頭とする

¹ 2016年4月8日、財政再建の一環として国有資産の売却を進めていたギリシャ政府は、アテネ近郊の同国最大の港ピレウス港を中国国有の海運大手である中国遠洋運輸集団(コスコ・グループ)に売却する契約に調印した。

医療物資支援を EU に求めてきた経緯がある。しかし、イタリア当局者から「EU のどの国も応じてくれなかった(マッサーリ駐 EU 大使)」との不満が漏れるように、混乱のさなかで EU の連帯感を示すには至っていない。逆にフランスやドイツが国外へのマスク輸出を抑止する政策などを展開しており、これをフォンデアライエン欧州委員長が「一方的な行動は良くない」と諫める体たらくである。こうした状況でイタリアに支援を供したのが中国であり、3月12日には約30トンの医療物資に加え、医療チームも到着したことが伝えられている。これを受けたディマイオ伊外相による「これが連帯というもの」という中国への称賛は言うまでもなく EU への当てつけである。

～イタリアと中国の関係性～

こうした動きをマスク外交と揶揄するのは簡単だが、欧州にとってはより深刻な話でもある。中国にとってイタリアは EU のセミアコ国の中で最もくみしやすい国の 1 つと考えられる。というのも、ちょうど 1 年前の 2019 年 3 月、イタリアが G7 メンバーとして初めて「一带一路」構想に署名したことが大きな驚きとともに報じられている。具体的には 2019 年 3 月 23 日、習近平・中国国家主席はコンテ伊首相と会談し、同構想に関する覚書に署名している。「一带一路」構想にイタリアを引き入れる真意については「イタリアの港湾都市を欧州進出の拠点として押さえること」という解釈が目立つ。イタリアの港湾都市へのアクセスが容易になれば、そこを起点として EU 域内へのアクセスも容易になり、「一带一路」構想の掲げる広域経済圏はより強固さを増す。合意にあたって習国家主席は 3 日間(19 年 3 月 21～23 日)、イタリアに滞在したが、22 日にローマでマッタレウラ伊大統領と会談した後、23 日にはコンテ伊首相と会談し、イタリアとの覚書署名に漕ぎ着けている。中国首脳がローマに訪問し、イタリア首脳と会談すること自体に意外感はないが、その後、習国家主席自らがわざわざ港湾都市パレルモを訪れるということがあった。また、習国家主席の訪伊に合わせトリエステやジェノバといった 2 つの港湾開発を中国国有の中国交通建設集団が請け負うことでも合意している。東のトリエステ、西のジェノバというイタリア海運の要衝に係る開発を中国の国有企業が請け負うという動きは、地政学上、EU にとって愉快的な動きとは言えないものであった。ちなみに今回、習国家主席が訪れたシチリア島のパレルモ(南)まで含めて俯瞰すれば、3 つの港を結ぶトライアングルが描ける。主要なイタリア港湾都市へ戦略的投資を集中させた先には、隣接するオーストリアやスロベニアを皮切りに欧州主要国への輸送ルートが見えてくる。中国はここまで見えているのだろう。

こうして中国がイタリアを通じて欧州で産業スパイ活動を展開したり、安全保障面での偵察活動を活発化させたりするのではないかとといった論点について EU が警戒し始め、文字通り、域内に持ち込まれた「トロイの木馬」ではないかとの不安も頻繁に目にするようになった。イタリア政府としても、こうした決断を満場一致で下したわけではないが、自国経済が精彩を欠く中、「金の出し手」としての中国の魅力に抗しきれなかった事情があるのは想像に難くない。中国との関係を緊密化することでイタリアが対中輸出を伸ばすことができれば、低迷する自国経済の打開策にもなり得る。高品質の日本製がそうであったように、イメージの良い高級ブランド品を筆頭として「made in Italy」が中国の富裕層に訴求力を持つ。中国からすれば、これまで発展途上国を中心に勢力を拡大してきた同構想に G7 の一角であり、欧州市場への玄関口にもなり得るイタリアを引き込めれば構想自体の信認(「格」)も高まる。両者にとって win-win の取り決めだったといってもあながち的外れとは言えまい。

～中国という「楔」が打ち込まれた欧州～

話を現在に戻す。とはいえ、医療物資の供給に関し、中国はイタリア以外にもスペインやドイツ、ベルギー、セルビア、また欧州に限らず日本、韓国、イランなどにも次々と展開している。新型コロナウイルスの震源地としての汚名を返上しようというのが主目的と見られ、欧州の域内政治バランスをかく乱しようという思いはあったとしても二義的なものだろう。まして欧州がここまで悲惨な状況にあることを思えば、対中感情が先鋭化する可能性すらある。多額の人道支援が緩衝材になるのであれば中国としては安いものである。とはいえ、一連の中国からの支援に対して、上述したディマイト伊外相の発言のほか、ブチッチ・セルビア大統領からも「欧州の連帯など存在しない。おとぎ話だった」、「われわれを助けられるのは中国だけ」といった発言が見られており、結果的には「EU よりも中国」という機運を高めることに寄与しているようにも見受けられる。

ちなみに、このブチッチ大統領の発言は 3 月 15 日、EU がマスクやゴーグル、防護服などの医療用品に関して EU 域外への輸出制限を決め、域内医療機関における必要分を確保・備蓄する動きを批判したものであった。セルビアの位置するバルカン半島は欧州に物資を運ぶ要衝でもあり、中国がインフラ投資などを通じて影響力を強めようとしているエリアでもある。例えばハンガリーなどもこのエリアに位置する国であり、中国から投資を受け入れる国として知られる。こうした国が EU として中国に強く出ようとする時に EU の一員として待ったをかけるという局面も見られている。

そもそも冒頭で紹介したギリシャの港湾が中国に売却された事実に関しても、EU と IMF がギリシャに国際金融支援を実行する条件として緊縮路線を強いた結果「売られた」という側面があった。それゆえ、ギリシャ国民からすれば「苦境に陥った自分たちに手を差し伸べてくれたのは EU よりも中国」という感情を抱いても無理はない。中国の立ち回りに関し、政治(とりわけ安全保障)の視点から様々な意見はあろうが、事実関係だけに目をやればギリシャ国民として「悪い話ではない」という情状酌量の余地もある。外交巧者と言わざるを得まい。

少なくとも、現在見られている中国の人道支援が元々存在した欧州の亀裂に対し楔(くさび)となっているのは確かであり、複雑な背景事情を踏まえ、理解をすべきものと考えられる。なお、こうした背景事情の中で中国と親密な関係にあるドイツがどう動くべきかというのも気になる。先進国最長の宰相であるメルケル独首相の任期もあと 1 年半である。その後継者選びは難航しているものの、誰が次期首相になるにせよ、ドイツが EU の中でリーダーシップを執っていくためには「中国からの切り崩しを受ける EU をどのように庇護していくべきか」という視点が必要になるだろう。それは「親しい友人は中国だけ」と言われたメルケル政権のような立ち回りが変化を迫られるということでもある。中国による一連の人道支援は欧州の地政学を語る上で様々な視点を持って評価したい。

市場営業部
チーフマーケット・エコノミスト
唐鎌大輔(TEL:03-3242-7065)
daisuke.karakama@mizuho-bk.co.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

バックナンバーをご希望の方は以下のサイトからお取り頂くことも可能です

<http://www.mizuhobank.co.jp/forex/econ.html> (Archives) http://www.mizuhobank.co.jp/forex/econ_backnumber.html

発行年月日	過去6か月のタイトル
2020年3月25日	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2020年2月分) リスクシナリオも繰り直し～日米金利差逆転というリスク～
2020年3月24日	「ドル化する世界」と新興国通貨の選別
2020年3月23日	「08年型のドル高」と円の「2大ステータス」
2020年3月19日	週末版(踏み込んだECB、パンデミック緊急資産購入プログラム～「抜かずの宝刀」も抜かれるのか?～)
2020年3月18日	FOMCレビュー～「不要不急で自滅」は予定通り?～
2020年3月17日	ECB政策理事会レビュー～胆力と失望の狭間～
2020年3月13日	週末版
2020年3月11日	ECB政策理事会レビュー～実質的なデビュ戦～
2020年3月10日	日銀の「次の一手」を考える～GPIFとの共同戦線は?～
2020年3月9日	ドル安相場の当然の帰結～疫病は契機に過ぎず～
2020年3月6日	週末版
2020年3月5日	欧州難民危機再び?～「見えない脅威」と「見える脅威」～
2020年3月4日	不要不急の利下げで自滅したFRB
2020年3月3日	各国政府・中銀の政策協調姿勢を受けて
2020年3月2日	最強通貨に返り咲いた円～年初来変化率がプラスに～
2020年2月28日	週末版(メインシナリオに関するリスク点検～疫病リスク、米利下げ、円高～)
2020年2月27日	健在だった「安全資産としての円買い」と加速する悲観
2020年2月21日	週末版(忌避されるユーロ～通貨安政策として先鋭化するマイナス金利政策～)
2020年2月20日	円急落は「日本売り」の結果なのか?
2020年2月19日	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2020年1月分) 危機モードが続く為替市場と無国籍通貨「金」の上昇
2020年2月18日	ユーロ圏経済の現状～中国とユーロ圏が風邪を引くと…～
2020年2月14日	週末版
2020年2月13日	それほど信頼できない「3月円高説」の実情
2020年2月12日	流動化し始めたドイツ政局～メルケル退陣まで1年半余り～
2020年2月10日	良好な雇用統計が浮き彫りにした市場の「甘え」
2020年2月7日	週末版(上がりそうにない原油価格～3つの理由と共にドル/円相場への含意を考える～)
2020年2月6日	改善が続く企業マインドをどう読むべきか
2020年2月4日	債券相場の現状と展望～遠すぎる物価「2%」～
2020年2月3日	プレジデントQ&A～アイルランド問題から漁業権問題へ～
2020年1月31日	週末版
2020年1月30日	FOMCを終えて～新型コロナウイルスと減速軌道の米国～
2020年1月29日	メインシナリオに関するリスク点検
2020年1月28日	デジタル通貨を巡る4大勢力～群雄割拠を読み解く～
2020年1月27日	疫病リスクと金融政策への影響などについて
2020年1月24日	週末版(ECB政策理事会を終えて～やや先走り感のあるラガルド総裁～)
2020年1月22日	日銀金融政策決定会合～「政熱経冷」という運～
2020年1月21日	ECB政策理事会レビュー～底打ち機運に乗り静観～
2020年1月20日	米大統領選挙と為替～潜む一抹の不安～
2020年1月17日	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2019年12月分) 週末版
2020年1月15日	「1998～99年」との違いはどこにあるのか～その②～
2020年1月14日	中国の為替操作国認定解除を受けて～ドル売り介入の催促～
2020年1月10日	週末版(「調達通貨は円よりユーロ」の答え合わせ～中東リスクを前に～)
2020年1月9日	予防的利下げの成否～「98年型利下げ」と「99年型利上げ」～
2020年1月8日	軍事衝突と原油高への考え方～円高は不幸中の幸いか?～
2020年1月6日	2020年、レンジ脱却に必要なもの～その②～
2019年12月25日	2020年、レンジ脱却に必要なもの
2019年12月24日	2020年の想定外はどこにあるのか?～6つの論点～
2019年12月23日	スウェーデン、マイナス金利解除の読み方～2020年への示唆～
2019年12月20日	週末版
2019年12月19日	米大統領選挙の左派リスクは2020年の波乱要因か? 本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2019年11月分)
2019年12月18日	やはり上げを失った債券相場～政治も金融も債券の足枷～
2019年12月17日	日銀金融政策決定会合レビュー
2019年12月16日	英総選挙を終えて～「次の山」は2020年6月末に～
2019年12月13日	週末版(ECB政策理事会を終えて～フクロウ型総裁の「人となり」～)
2019年12月12日	FOMCを終えて～「タカ派的利下げ」から「ハト派的現状維持」～
2019年12月11日	円の基礎的需給環境～基礎収支に映る変化～
2019年12月10日	道標を失った為替市場～マイナス金利解除がキーに?～
2019年12月9日	英国総選挙の論点整理～事実上、「2度目の国民投票」～
2019年12月6日	週末版(2019年の為替市場を概観する～円は結局強かった～)
2019年12月5日	ECB政策理事会レビュー～デビュー戦、3つの見どころ～
2019年12月3日	ドイツ政局の流動化について～メルケル退任まであと2年～
2019年12月2日	金融政策に環境配慮は必要か?～制御すべきは気候ではなく物価～
2019年11月29日	週末版
2019年11月26日	円安リスクの点検～「ツケ」が怖い2020年～
2019年11月25日	名目実効為替相場(NEER)で読む2019年のドル相場
2019年11月22日	週末版(ドラギ元総裁、最後のECB政策理事会議事要旨～「結束(unity)」と財政政策～)
2019年11月20日	「ドル化した世界」で進む「金融政策の一本化」 本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2019年10月分)
2019年11月19日	ドイツは底打ちしたのか?～リセッション回避も残る不安～
2019年11月18日	「株価の虞」と「予防的緩和」について考える
2019年11月15日	週末版(ラガルド体制の「overhaul(刷新)」ミッションの行方～総裁会見と投票方式について～)
2019年11月14日	欧州の「弱さ」源泉～輸出拠点が裏目にたドイツ～
2019年11月13日	円高予想の誤算と「ドル化した世界」という悩み
2019年11月12日	動かない相場の背景にある「円の不人気」
2019年11月11日	「公的デジタル通貨 vs. リブラ」の様相に
2019年11月8日	週末版
2019年11月1日	週末版
2019年10月30日	ラガルド新ECB総裁を巡る3つの論点
2019年10月29日	円安リスクの点検～欧州・中国の復調はあるか?～
2019年10月28日	ドラギ総裁最後のECB理事会～危機の「生き字引」～
2019年10月25日	週末版
2019年10月24日	またも史上最小値幅～体感「5円」以下という異例～
2019年10月23日	「リブラ」阻止で一致するG20～サッカーパーク証言を前に～
2019年10月21日	思い出したい「10月31日」の経緯～次に起こることは～ 本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2019年9月分)
2019年10月18日	週末版(2度目の離脱協定案合意～3つの論点を整理～)
2019年10月16日	FRBのTB購入を受けて～欲しかった「ずる賢さ」～